

インドネシアの高等学校における美術教育教材

福田 隆真

On the Learning Materials of High School Art Education in Indonesia

FUKUDA Takamasa

(Received January 6, 2016)

キーワード： インドネシア、高等学校、美術教育、教材

はじめに

インドネシアの高等学校の美術教育は「芸術文化 (Seni Budaya)」という教科の中で行われている。芸術文化の教育内容は、美術 (Seni Rupa)、音楽 (Seni Musik)、舞踊 (Seni Tari)、演劇 (Seni Tari) から構成されている。

本稿ではインドネシアの高等学校教科書「芸術文化」の中から美術教育に関する内容を解説し、インドネシアの美術教育の文脈研究の一部とする^{注1)}。

1. 高等学校 1 学年美術教育教材

2006年に制定された教育課程では高等学校 1 学年の美術教育は次のように述べられている^{注2)}。2 学期制になっている。

1 学期

内容は美術の鑑賞と表現に分けられる。

鑑賞では、地域の美術や工芸作品のユニークな理念と技術について理解することと、それらの作品の理念や技術を鑑賞する態度を養う。

表現では、美術作品の制作を通して自己表現をする。地域の有用な技術や模様を伴う作品を計画する。それらの有用な技術や模様を伴う作品を制作する。

2 学期

内容は美術の鑑賞と表現に分けられる。

鑑賞では、インドネシアの美術や工芸作品のユニークな理念と技術について理解することと、それらの作品の理念や技術を鑑賞する態度を養う。

表現では、美術作品の制作を通して自己表現をする。インドネシアの有用な技術や模様を伴う作品を計画する。それらの有用な技術や模様を伴う作品を制作する。クラスや学校での展覧会のために自分で作品を準備する。

そして具体的な題材としては以下のような内容がある。

1 学期

単元 1 美術の鑑賞

- A 意味と定義：美学としての芸術、創造としての芸術、
- B 芸術の種類、
- C 芸術の機能と目的：個人的機能、社会的機能、

D 応用美術：写真、イラストレーション、グラフィックデザイン、

E 美術の媒体

単元2 美術作品の制作

A 美術の基礎的要素：点、線、面、形態、空間、色彩、材質感、明暗、

B 文字のデザイン

C 応用美術作品の制作技法：粘土による制作、木材・竹による制作、自由な材料による制作

2学期

単元9 美術の鑑賞：広告デザイン、レリーフ、工芸、ミニチュア、建築、衣装、装飾美術

単元10 美術作品の制作

A アニヤマン：アニヤマンの材料、アニヤマンのモチーフ、

B 展覧会の準備

1学年での「芸術文化」の内容は、単元1、2が美術、単元3、4が音楽、単元4、5が舞踊、単元7、8が演劇で1学期の内容となっている。2学期は、単元9、10が美術、単元11、12が音楽、単元13、14が舞踊、単元15、16が演劇となっている。

芸術文化の教育内容の全体的な特徴の一つは、各分野の題材において鑑賞教育が重視されていることである。1学年においても16の単元の半分は鑑賞に費やされている。このことはインドネシアの多様な芸術文化の理解を重視している。鑑賞の最初には定義や分野や機能、語彙の解説など導入に必要な内容となっている。そして2学期の鑑賞ではインドネシアの工芸を取り上げている。制作では単元2で造形要素を取り上げており、美術における視覚言語の重視を行っている。そして、2学期ではアニヤマンのような伝統工芸の制作を題材として、インドネシア独自の美術の理解を進めている。

2. 高等学校2学年美術教育教材

高等学校2学年の教材構成は1学年とほぼ同じで、1学期は、単元1－4が美術、単元5、6が音楽、単元7、8が舞踊、単元9、10が演劇で構成されている。2学期は、単元11－14が美術、単元15、16が音楽、単元17、18が舞踊、単元19、20が演劇となっている。

美術の教育課程では表現と鑑賞に分かれている。鑑賞では、工芸、美術、演劇の理解と鑑賞がなされている。表現では、工芸作品を通しての自己表現、美術作品の制作、演劇作品を通しての自己表現が示されている^{注3)}。

具体的題材としては以下のようにになっている。

1学期

単元1 美術の鑑賞：工芸作品

単元2 美術作品の制作

A バティック：材料、制作過程

B 木彫

C 刺繍

D 配色

E 刺繍制作：針の刺し方の基礎、材料と用具

単元3（選択）美術の鑑賞：遠近法、一点透視、二点透視、三点透視

単元4（選択）美術作品の制作：立体作品のデザイン

2学期

単元11 美術の鑑賞2

A デザインの原理：統一、バランス、リズム、均衡

B 外国のデザインと工芸作品：立体作品、平面作品

単元12 美術作品制作2：サブロン

単元13（選択） 美術の鑑賞 2

単元14（選択） 美術作品制作 2：立体の展開図、建築設計

1 学年に続いて、鑑賞も表現においても伝統的工芸を題材としている。選択の題材ではデザインの内容を扱っている。2 学期の鑑賞においてはデザインの原理として視覚言語を扱い、外国のデザインの紹介を行うことでインドネシア独自の視覚言語を認識させようとしている。制作においても伝統的な題材を行っている。選択の題材はデザインを扱っている。

3. 高等学校3 学年美術教育教材

高等学校3 学年の教材構成は2 学年とほぼ同じで、1 学期は、単元1、2 が美術、単元3、4 が音楽、単元5、6 が舞踊、単元7、8 が演劇で構成されている。2 学期は、単元9、10が美術、単元11、12が音楽、単元13、14が舞踊、単元15、16が演劇となっている。

美術の教育課程では表現と鑑賞に分かれている。両分野とも美術を対象にしている。鑑賞では、近代美術と現代美術の作品等が重視されている。制作においても近現代の美術作品が強調され、同時にインドネシア全土を対象にした美術文化の社会的文脈の学習を奨励している^{註4)}。

具体的題材としては以下のようになっている。

1 学期

単元1 美術の鑑賞：写実主義、自然派、ロマン主義、印象派、表現主義、フォーヴィズム、キュビズム、未来派、ダダ、シュールレアリズム、抽象主義、ポップアート、ポストモダン

単元2 美術作品の制作

A 純粋美術：絵画、彫刻、レリーフ

B 絵画：絵画・描画の制作

2 学期

単元9 美術の鑑賞 2

インドネシアの近代美術：開拓者の時期、魅力的なインドネシアの時期、プルサギ（インドネシア美術家連盟）の時期、日本統治時代、独立後の時期、アカデミーの時期、1960年代から現在まで、現在までのインドネシア絵画の作品

単元10 美術作品制作 2

A 油絵の具による絵画制作：表現媒体の開発

B 彫刻制作：粘土による彫刻、砂とセメント、木彫

3 学年の題材は西洋とインドネシアの美術文化を対象としている。1 学期の鑑賞では近代の西洋美術の歴史を紹介している。19世紀から現代までの絵画、彫刻、デザインの変遷を解説している。そして表現の分野ではそれらの美術史の中から絵画表現を取り上げて、漫画やイラストレーションを含めて絵画制作を行うように設定している。

2 学期では、西洋近代美術とインドネシアの関連を解説している。19世紀のはじめに西洋美術がインドネシアに影響を及ぼし、西洋の美術家がインドネシアの風景や人物を油絵の具や水彩絵の具で表現した。そのことからインドネシアに美術家が生まれ、インドネシア独自の絵画表現が追究されていくのである。鑑賞の題材では、西洋美術の主義や流派に影響されたインドネシアの画家の作品がそれぞれに紹介され、西洋美術からの自国化の様子が分かるように示されている。そして表現の題材では油絵の具による絵画と西洋的な彫刻とインドネシアの彫刻が示されており西洋とインドネシアの関係を認識させる題材となっている。

4. インドネシアにおける美術教育の文脈について

美術教育を本質と文脈に分けて考えると、本質的な内容はいずれの国や地域においても、創造性の開発や育成、情操や情緒の育成、美術文化の理解、表現力や鑑賞力の育成等、同様な内容が設定される。しかし、

美術教育を実施する現実では、基盤となる文化の相違、教育制度の違い、経済的・人的環境の相違、美術文化に対する価値観の違い、伝統文化の相違などの様々な状況の相違が存在する。こうした文脈の違いによって、美術教育がどのように実施されているかを明らかにすることにより、その地域や国での独自性が浮上してくる。インドネシアにおいてもこうした観点から、以下のような美術教育の文脈が想定される。

4-1 西洋文化との関連

アジア地域においては近代以降の西洋文化の影響が様々な分野で生じている。それはアジア地域の多くが西洋諸国によって植民地化されていたという経緯が大きい。さらには近代化という発展の筋道において、近代化＝西洋化、という図式が顕在化してくることによるものである。日本も明治維新前辺りから西洋化の波が押し寄せて、明治に入り、西洋化＝近代化の図式に多くの分野で受容された。そしてその西洋化は自国や民族をあらためて考える契機ともなっていく。

美術文化においても、西洋美術がアジア地域に影響を及ぼした。インドネシアは独立以前はオランダの植民地であり、第二次世界大戦の一時期に日本が統治していたこともあるが、基本的にオランダを中心とした西洋文化と文明が広く影響を及ぼした。西洋の影響による美術文化は19世紀から表面化し、油絵の具による作品の制作が行われた。絵画の表現も西洋画の技術・技法が取り入れられた。西洋人によるインドネシアの美術絵画はインドネシア人にも影響を与え、やがてはインドネシア人の美術家集団が生まれ、インドネシアの近代美術の創造へと向かうことになる。

インドネシアの高等学校の美術教育ではこうした、西洋美術の近代史を紹介し、インドネシアがどのように関連を持ちながら独自の美術文化を生み出してきたのかを、鑑賞の重要な題材として設定している。

4-2 伝統文化の再生

美術教育が西洋美術によって影響を受けてきたことは、インドネシアに限らずアジア諸国や地域では同様な状況を見ることができる。そして西洋化＝近代化の図式の延長上に、伝統文化の再確認と再生が存在している。特に東南アジアでは、伝統的な美術文化の多くは工芸であり、近代化の過程で西洋美術が移入され消化されてきた。グローバル化する過程において伝統文化としての工芸が再認識され、再生することになる。特に民族が持っている工芸文化は美術教育においても重視されている。陶芸、木工、竹工芸、染織、玩具などの日常生活に欠かせなかった工芸品は、近代化とともに大量生産の製品に取って代わられてきたが、美術教育の中で再生され美術文化の一つとして継承されている。

4-3 視覚言語と地域性

20世紀初頭のデザインの発生によってヨーロッパから始められてきた視覚言語の系統化と教育は、バウハウスの教育を契機として、国際様式となって発展した。いわゆるインターナショナル・スタイルの席卷である。それは近代化＝西洋化の図式と同様な道筋を通り、機能的合理的なデザインによる製品や商品が世界中に流通する結果となった。

視覚言語の系統性によるデザインの創造は特に第二次世界大戦以降、グローバル化してきた。そして視覚言語の考え方はデザインの分野だけではなく、美術教育における方法論として発展してきた。我が国の構成教育や最近の教育課程における共通事項の考え方である。東南アジアにおいてもシンガポール、マレーシアにおいては視覚言語の方法論による美術教育が実施されている。そして、それはインターナショナル・スタイルとしてデザインの分野だけの方法論ではなく、自国や民族の美術文化を基盤とした視覚言語の活用である。色や形はそれぞれの地域の文化に独自の意味を持っているものがある。そうした地域性を生かした視覚言語を重視しながら美術教育を実践している。インドネシアにおいてもそれぞれの独自の伝統文化に基づいた視覚言語の分析と統合によって美術教育の題材の編纂を行っている。それらは工芸作品の制作の中にも見られる。

このようにインドネシアはインドネシアの文脈の中で西洋文化の受容と独自性を追究した美術教育がなされている。そして知的発達の著しい中等教育においては、西洋美術とインドネシア美術を鑑賞と表現の活動を通じて学習するように設定されている。このことがグローバル化社会におけるアイデンティティの確立であり、多様性の中の統一を国是とするインドネシアの特徴でもある。

注

1 本稿は科学研究費補助金基盤C（課題番号：24531135 アジアにおける美術教育の文脈研究 研究期間2013－2015年度）による研究の一部である。研究に使用した教科書は以下である。

・Drs. Yayat Nusantara, ” Seni Budaya untuk SMA Kelas X” , Penerbit Erlangga, 2007

・Drs. Yayat Nusantara, ” Seni Budaya untuk SMA KelasXI” , Penerbit Erlangga, 2007

・Drs. Yayat Nusantara, ” Seni Budaya untuk SMA KelasXII” , Penerbit Erlangga, 2007

2 Drs. Yayat Nusantara, ” Seni Budaya untuk SMA Kelas X” , Penerbit Erlangga, 2007、pp.6-7

3 Drs. Yayat Nusantara, ” Seni Budaya untuk SMA KelasXI” , Penerbit Erlangga, 2007

4 Drs. Yayat Nusantara, ” Seni Budaya untuk SMA KelasXII” , Penerbit Erlangga, 2007

参考文献

福田隆眞・佐々木幸：「インドネシアの中学校美術教育の教材について」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第36号，2013.

福田隆眞・佐々木幸：「インドネシアの近代美術と美術教育について」，山口大学教育学部研究論叢第64巻第3部，2014.

福田隆眞・佐々木幸：「インドネシアの小学校美術教育について」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第40号，2015.